



KBS京都賞

## ぼくができる社会を明るくする運動

京都市立凌風小中学校 六年 長谷川 はせがわ 寛大 かんた

ぼくは最近気付いた。ぼくの通っている希望の家児童館は、結構おもしろい。子どもだけでなく、すごくいろんな人がいる。学童もそうだし、そろばんをやっている子どももいれば、韓国語を勉強しているおばあさん、そうじをしている人、芸術家もいれば、町をよくしようとしているおじいちゃんもいる。〇歳から九十歳の人までいる。昔、犯罪をしてしまった人もいる。

そして、ぼくは、希望の家の春祭り、秋祭りが大好きだ。なつかしい友達や保育園の先生と久しぶりに会える。また、出店で買い物をしてみんなで食事をするのも楽しみにしている。中でも、今年の春祭りではフランクフルトを食べた。外がパリッと焼けていてとても美味しかった。その店の看板に「京都ダルク」と書いてあった。その時のぼくは京都ダルクがどのような人たちなのか知らなかった。

夏休みの宿題の社会を明るくする運動の作文の題材を考えていた時に、京都ダルクのことを調べてみようと思った。

ぼくは夏休みのある日、京都ダルクで働いている大久保さんに話を聞くことができた。京都ダルクは、薬物依存症からの回復を目指す仲間が集まっている。今日一日、薬物を使わずに過ごす。その一日一日を積み重ねて、回復を目指している。みんなでミーティングやボランティア活動、食事を作るなど、他にも様々な活動がある。大久保さんも、「薬物依存症」から回復した人の一人だそうだった。薬物に手を出してしまったのは、「しんどかった」からだとおっしゃった。人に相談できなかった。そして、すぐに人のせいにしてしまう。「自分がしんどいことを親や先生に分かってほしかった。」中学生く

らいから薬物をやりだし、周りにもそんな仲間がいっぱいいた。学校で勉強ができなかったらどんどん落とされていくのがいやな人もいた。薬物を使うことで、「スツキリして、楽になり、今思っていることが、何でも話せるようになる。」

ミーティングでは、仲間と同じ場所に集まって話をするといい。なかなか人に自分の悩みや困りを言えなかった。相談できなくて、追い詰められてしまった。そのため、薬物に手を出してしまった人たちは、自分の正直なことを言うことが難しい。でも、同じ経験をしている京都ダルクの仲間といることで少しずつ、自分の話ができるようになる。話しているうちに仲間の悪いところや困りが先に分かり始める。それを伝えているうちに自分もそのようなことがあるのではないか、ダメな部分があるのではないかと考えられるようになるそうだった。それが仲間の良いところだと思う。

このことから、孤独な人をなくし、悩み事や相談、自分の本当に伝えたいことを伝えることができる。「友達」「仲間」がいて、そのようなことができる環境を作っていくのもぼくたちの役目だと思う。だから、ネットワークサロンはここにある。自分一人で苦しみやしんどさをかかえこむ必要はない。

自分の周りにも、もしかしたら孤独で戦っている人がいるかもしれない。困っていることや悩みを人に話せずにいる人がいるかもしれない。そんな人たちの話を聞ける、仲間ではくはないかと思つ。そのためには、まずぼくが、大切な仲間悩みを打ち明けられる人になりたい。人に頼って人からも頼られる人間になりたい。社会を明るくする運動とは、そういうことだと思つた。

十一月にある秋祭り、いつものようにフランクフルトを食べるのが楽しみだ。



KBS京都賞

# みんなで育てよう！明るい社会の芽

長岡京市立長岡第三中学校 二年 池田<sup>いけだ</sup> 初依<sup>つひ</sup>

「あれ、ちよつと見てもうさ。」

シヨッピングモールでお父さんがあるコーナーに立ち寄った。

そこには、木の温もりを感じさせる椅子などの家具や、可愛らしいままごとのキッチンが展示されていた。私は、そのままごことや、赤ちゃんが使う木のおもちゃのあまりの可愛らしさにすっかり虜になつてた。

するとお父さんが、

「このリュック、良いなあ。」

と私の背中に当てながら言った。

「やっぱり似合ってる。」

と言いつつながら値札を見ている。

「じつじつ所の物も、やっぱり質は良いから……。」

と言った。

私はその言葉に違和感を感じ、この場所が、一般のお店ではない事に初めて気が付いた。

私は小走りで入口を確認した。入口の横断幕には、刑務所作業製品販売と書かれている。私は驚いた。受刑者が作った物なのに、なぜ普通の値段で売っているのか。受刑者にも、それを利用する企業にもメリットが思いつかない。なぜわざわざこの様な取り組みをしているのか。疑問は尽きなかった。

家に帰ってからお母さんに聞いてみた。

「メリットもないのに、なぜ犯罪を犯した様な人間が、刑務所で製品を作っていると思ってる？」

するとお母さんは、少し考えてから言った。

「受刑者が、立ち直って、これからの人生をやり直せる様にじゃない？あと、受刑者が作った物だからと言って、それを買う人にメリットがないわけではないんじゃない？」私ははっとした。今まで、犯罪は取り返しのつかない事になるもので犯罪を犯した人は、もうこれからなんて無い、もつやり直せないと思っていた。

一度犯罪を犯した人は、就職や人との付き合いが大変、などの意味では当てるまる部分があると思う。しかし、犯罪を犯した人を猛獣かのように見ている。

これが、私が更正について知るきっかけだった。私は早速パソコンを立ち上げた。

調べていくと、capicという言葉がたくさん出てきた。capicは刑務所作業製品と言つより広く親しめるブランドイメージに変えるという意味で作られた名前だそうだった。確かに、刑務所作業製品と聞くと、堅いイメージを受けるが、capicと聞くとキャッチーなイメージを受ける。

詳しくは矯正協会刑務作業協力事業という英語の頭文字をとつたもので、刑務作業製品販売の事だった。

この事から、刑務所作業製品の悪いイメージを変えようと工夫していることが分かる。しかし、私を含むほとんどの人は、刑務所作業製品についてあまり知らないと思う。さらに、良いイメージを持っている人は少ないと思う。刑務所作業製品についてみんなに知ってもらうためには、まずは自分が知らなければならぬ。

その後、気になる事がたくさんあって、マウスを握った私の手は止まらない。

capicのホームページを見つけた。そこには私の知りたかつた事がたくさん載っていた。

そこには、刑務所作業製品を作る理由が載っていた。「刑務作業は、受刑者に規則正しい勤労生活を行わせることにより、心身の健康を維持し、勤労精神を養成し、生活態度及び共同生活における自己の





役割、責任の自覚を助長するとともに、職業上の知識や技能を付与し、円滑な社会復帰を図ることを目的として行っている。」と書いてあった。

刑務所作業を利用する企業メリットについても調べてみた。一定の労働力が確保できるという事や、敷地の購入費、工場等の建設費がいらぬ事などだ。

刑務所作業製品を刑務所で作り、しっかりとした製品として売る事で、受刑者の更生を促すとともに、企業のためにもなる事が分かった。刑務所作業製品の良い面について、みんなに知ってもらうには、製品の良さを友達に伝えたり、刑務作業所の人が、広い世代が使うSNSのスタンプを作成する事等ができると思う。

「このリリック良いなあ。」

お父さんの一言で、私は受刑者の見方が少しずつ変わっていった。刑務所作業製品を作り、更正を願う人、そして、それを支える人達が居るということ。

何も知らずに偏見を持つのではなく、まずは知る事が大切なのだと思った。

お父さんが私にしていた様に、小さな言葉の種をまき、社会にたくて丈夫な根を広げた先に、明るい社会の芽が生えていくのではないかなと思う。

